

『双蝶々曲輪日記』

寛延二年（一七四九）七月に竹本座で初演された全九段の内、「難波裏喧嘩の段」は五段目、「引窓の段」は八段目にあたる。放蕩をくり返す山崎屋与五郎、廓遊びから足を洗った南与兵衛、大坂相撲の大関濡髪長五郎、米屋の倅で素人相撲の放駒長吉、この四人の青春をめぐる物語である。

与五郎の恋人である大坂新町の傾城吾妻を、西国の侍平岡郷左衛門が身請けしようと、与五郎の父に恩のある濡髪、平岡の後押しをうけた放駒までを巻き込んだ対立となる。放駒は姉お関の計らいで、悪い仲間との縁を絶ち、濡髪と兄弟の縁を結ぶというのが四段目までの前提。「難波裏」では、廓を抜けた与五郎と吾妻を、平岡郷左衛門と三原有右衛門が追い、濡髪が兩人と、様子を目撃したならず者二人の、計四人を殺めてしまう。「難波裏」は、原作をわずかに略した詞章で、兩人殺害後の吾妻の嘆きなどは後補されたもの。立ち回りは、御簾内のメリヤスで表現される。

一方、南与兵衛の恋人の傾城都は吾妻と昵懇。与兵衛も都を争って太鼓持ちの佐渡七を殺してしまうが、佐渡七は追い剥ぎで、罪は贖金遣いの悪人に被せてお咎めなし。与兵衛は、実家の八幡里で都と新婚生活に入る。そこへ訪ねてくるのが濡髪長五郎。運の良い男・与兵衛と、運の悪い男・濡髪が、ここで交錯することになる。

放生会を翌日に控えた日、人目を避けて忍んできた濡髪を、何も知らぬ母は喜んで迎える。郷代官の家柄だった与兵衛は、名も十次兵衛と改めて代官の職につき、初仕事がなんと濡髪捕縛。二階に濡髪が忍んでいることを知った十次兵衛だが、母の懇願をいれて、捕縛を断念する。濡髪が十次兵衛に捕らえられようとするのを、母とお早が必死に止め、濡髪も一旦はその気になるが、思い直してやはり縄にかかろうとする。十次兵衛がその戒めの縄を切ると、引窓が開いて月光がさし込む。夜が明ければ役目は終わった、として、十次兵衛はあらためて濡髪を逃がしてやる。

「引窓の段」の口（俗に「欠け椀」）は、名もお早と改めた都と、与兵衛の継母の暮らしを描くところからはじまる。母には以前の嫁ぎ先に実子があり、それが濡髪長五郎。九州へ落ち延びようとする濡髪は、ひとめ母の顔が見たいとこの家に立ち寄ったという設定。事情を知らぬ母は来訪を喜び、お早も廓での顔馴染みでもあり、二階座敷へ通して歓待することになる。

与兵衛が役所から帰ってくる「人の出世は時知れず」からが切場。語り出しの呼吸が、他にあまり類がなく難しいとされる。郷代官の役目を仰せつけられた与兵衛は、亡き父の名を受け継いで南方十次兵衛と改めた心弾み。仕事関係の連れがあるので母と嫁は遠慮、お尋ね者詮議の子細を聞くことになる。平岡丹平と三原伝蔵は郷左衛門と有右衛門の兄弟で、敵役の兄弟は敵役、「テへへへ」という笑いに安っぽい相貌が浮かぶよう。

かくて初仕事は濡髪の捕縛となった与兵衛。濡髪が二階にいることを明かせない母と嫁。そもそも濡髪が母の実子であることを与兵衛は知らないとい

う状況下で、お互いに包み隠す心の表と裏、天井の明かり取りのために引窓を開閉することによる光の明と暗、武士になったばかりの与兵衛の立場、実子と継子の二人の息子という、様々な二重性が対照されながら描かれてゆくことになる。

濡髪を捕らえるつもりか、と問うお早。「母人にも嘸お悦び」と初手柄を焦る与兵衛。そのうちに与兵衛は、二階に人相書き通りの濡髪がいることを知る。その上で、その絵姿を売ってほしいと、永代経を読んでもらうための大事な金を投げ出す母。不審と、推量と、確認と、懇願と、愛着と。詞のやりとりを中心に、お互いの胸の内を探り合う間が核心となる。現代以上に養子縁組が多かったと思われる江戸時代にあって、実子と継子を選べと言われたらどうするべきか、という深刻な問いかけは、作者並木千柳（宗輔）が好んで描いた題材。そして千柳（宗輔）は、常に血縁の実子を取る結末を選んでいる。「何とその御子息は今に堅固でござるか」「与兵衛。村々へ渡すその絵姿。どうぞ買ひたい」。このやりとりが、その主題の集約されるところとなる。

与兵衛は手柄を諦めて見逃そうとするが、それでは濡髪の義理が立たない。自首して出ようとする濡髪、それを留める母と嫁。一旦は母のために落ち延びることを承知するものの、やはり義理に立ち返る濡髪。それぞれに互いが互いを思いやる心と恩愛に絡み取られる、いわば泥沼のような愛情が語られる。

それでも最後には、義理に踏みとどまる母。しかし、与兵衛が、明るい内は自分の役目でなく、暗くなってからの協力を依頼されたという条件を利用して、引窓を巧みに利用した結末を用意する。老母を中心として、恩愛の交錯を、巧みに、深くえぐる名作といえよう。

（児玉竜一）